

バルビゾンの風

誇れる一枚の絵



ご挨拶

学生時代にミレー、コロー、クールベを知り
ヨーロッパ絵画に大いなる興味をもちました。

そして、近代絵画を先導したイギリスのターナーを勉強し
フランスのジョルジュ・ミシェルを知りました。

この偉大なる二人の画家が近代絵画の原点と言うべき
光と影と空気そして自然を余すところなく研究し尽くして
バルビゾンの画家集団へ繋ぎ現代絵画へと導いたのです。

そのバルビゾン派の画家集団の絵は自然への飽くなき追求の中から
生まれでた『素晴らしい！！』の一言に尽きる本物の風景画です

そのバルビゾン派の作品をバルビゾン派に共鳴する皆様に
『誇れる一枚の絵』としてお手元にお届けしご鑑賞いただければと
思っております。どうぞご期待下さい。

アートサービス株式会社
代表取締役 津田琢磨

バルビゾン派

パリの南東約60キロのところにある、フォンテーヌブローの森のはずれにあるバルビゾン村に1824年頃から定住し、或いはガンヌの宿に常宿して、それまでフランス美術にはあまり見られなかった、田園風景、農民の働く人々、牛や馬や羊をありのままに描いて画壇に新風を起こした画家達を「バルビゾン派」と称している。

ジョルジュ・ミシェル、カミーユ・コロなどバルビゾン派の先駆者と言われ、晩鐘、落穂拾い、種蒔く人を描いたジャン＝フランソワ・ミレーもバルビゾン派であり100人以上もいる中で特に中心となった画家が七星と呼ばれコロ、ディアズ、トロワイヨン、ルソー、デュプレ、ジャック、ミレー、レオン・デュプレ、ドービニー、自然から学ぶこと大切さを心から感じて絵画に研鑽した画家達でありました。近代絵画の原点がここにあり絵画傾向は外光派、自然主義派と言われ、総称して前期印象派でありセザンヌ、モネなどの印象派に続きゴッホなどの後期印象派が出現してくるのです。



ガンヌの宿



バルビゾン村の地図

バルビゾン派の代表的な作家たち

- ジョルジュ・ミシェル (1763-1843)
- ジャン・バプティスト・カミーユ・コロー (1796-1875)
- カミーユ・フレール (1802-1868)
- アレクサンドル・カブリェル・ドカン (1803-1860)
- ポール・ユエ (1803-1869)
- ナルシス・ヴィルジール・ディアズ・ドラ・ペーニャ (1807-1876)
- オノレ・ドーミエ (1808-1879)
- コンスタン・トロワイヨン (1810-1865)
- ジュール・デュプレ (1811-1889)
- ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812-1867)
- ニコラ・ルイ・キャバ (1812-1893)
- シャルル・エミール・ジャック (1813-1894)
- ラヴィエ・オーギュスト・フランソワ (1814-1895)
- フランソワ・ルイ・フランセ (1814-1897)
- ジャン・フランソワ・ミレー (1814-1875)
- シャルル・ルルー (1814-1895)
- アントワーヌ・シャントルイユ (1816-1873)
- レオン・ヴィクトール・デュプレ (1816-1879)
- シャルル・フランソワ・ドービニー (1817-1878)
- ギュスターヴ・クールペ (1819-1877)
- アンリ・ジョセフ・アルピニー (1819-1916)
- オーギュスト・ポール・シャルル・アナスタジー (1820-1889)
- ユージェーヌ・アントワーヌ・サミュエル・ラヴィエイユ (1820-1899)
- ロジエ・ジュール・シャルル (1821-1882)
- アレクサンドル・ドフォー (1826-1900)
- トルイユベール・ポール・デジレ (1829-1900)
- シャルル・フェルディナン・セラマノ (1829-1909)
- ジャン・フェルディナン・シェノー (1830-1906)
- レニエ・ジャン・エミール (1835-1910)
- ルイ・エメ・ジャピイー (1840-1916)
- イボリット・カミーユ・デルピイー (1842-1910)
- レオン・リッシュ (1847-1907)
- ピエール・エマニュエル・ダモア (1847-1916)
- ジュリアン・デュプレ (1851-1910)

夕暮れの風景

キャンバスに油彩 仏 10号



Georges Michel ジョルジュ・ミシェル(1763-1843)

17世紀オランダ風景画に影響を受け、フランスでいち早く自然に即した風景画を描いた。ルーヴル美術館でフランドル派やオランダ派の作品の修復をしているうちにその影響を受け、当時はまだ風車小屋しか見当たらないモンマルトルに住み、荒涼たるモンマルトル風景を描いた。ほとんど画壇から忘れられたまま世を去ったが、ルソーやデュプレに高く評価され、近代風景画の先駆者としてまた、バルビソンの先駆者としても名を不滅のものとした。

バルビゾン派の先駆者・近代風景画の先駆者

逆光の中の風車

キャンバスに油彩 仏 P12 号



Georges Michel ジョルジュ・ミシェル

森の中

キャンバスに油彩 6号(仏)



NARCISSE-VIRGILE DIAZ DE LA PEÑA

ナルシス・ヴィルジル・ディアズ・ド・ラ・ペニャ (1807～1876)

バビルゾンに滞在。

幻想性豊かな絵に写実性が加わり、森の中の風景を神秘的に描いた。

ルノワール、モネ、シスレーらとも親交を結ぶ。

レジオンドヌール勲章を受賞。

バルビゾン 七星の一人

夕べの祈り

キャンバスに油彩 21.5×16.5cm



NARCISSE-VIRGILE DIAZ DE LA PEÑA

ナルシス・ヴィルジル・ディアズ・ド・ラ・ペニャ (1807～1876)

バルビゾンの平野風景

キャンパス・油彩 M25号



NICOLAS-LOUIS CABAT

ニコラ＝ルイ・キャバ(1812～1893)

早くから古典的な絵画を放棄し、フォンテーヌブローで自然に即した風景画を描いた。森の中には彼の名に因んだものが二つある。

ひとつは「キャバの沼」と呼ばれる沼で1937年に発表した冬景色のなかに描かれたものである。もう一つは「サンザシ」と名付けられた十字路のそばにある「キャバの岩」である。

牛飼い

パネル油彩（仏8号）



CHARLES-ÉMILE JACQU

シャルル＝エミール・ジャック(1813～1894)

バルビゾンの村でジャックはミレーやルソーのすすめもあって油彩画を描きはじめ、版画時代に築きあげたすぐれた技巧を油彩画に反映し、羊の群れと羊飼いという牧歌的な主題を写實的に描いてたちまち人気画家となった。

ミレー、ルソーと共にバルビゾン派の基礎を築く

バルビゾン 七星の一人

果実のある生物

パネル油彩（仏8号）



CHARLES-ÉMILE JACQU

シャルル＝エミール・ジャック(1813～1894)

沼地で休息する羊飼

キャンパスに油彩 10号(仏)



LEON-VICTOR DUPRE

レオン・ビクトール・デュプレ(1816～1879)

フランス中西部にあるリモージュに生まれ、
兄ジュール・デュプレに師事画題や様式に強く影響を受ける。

兄の好んだ荒々しいタッチで描かれた嵐の前の激しい風景よりも、
落ち着いたのどかな田園風景を好み、暖かな色彩で描いた。

風景

キャンパス・油彩 M15号



Charles François Daubigny

シャルル＝フランソワ・ドービニー(1817～1878)

パリ生まれの風景画家でバルビゾン派の巨匠である。
自然をありのままに写す作品はブーダンら初期の印象派の態度に近い。
ゴッホ最後の地となった南仏オーヴェール＝シュル＝オワーズの
風光を発見したのも彼であり、銅版画にも優れたものがある。
1860年以降、画風は印象主義に近づき印象主義の先駆者と見られている。

ジュラの風景

油彩 12号(仏)



Gustave Courbet ギュスターヴ・クールベ (1819~1877)

ミレー、コローと並んで写実主義の三大巨匠である。

代表作に「オルナンの埋葬」、「画家のアトリエ」、「嵐の後のエトルタの断崖」がある。

フォンテーヌブローの羊たち

キャンパス・油彩 F20(仏)



Charles · Ferdinand · Ceramano

シャルル＝フェルディナン・セラマノ(1829－1909)

ベルギーのティエルト生まれ。

シャルル・エミール・ジャックに師事し、その影響を強く受ける。
生涯のうち40年以上をバルビゾン村で過ごしたバルビゾン派の画家。

共に学んだ画家、ジャックの助手を務めていたこともあり、
その画風に追随している。風俗画、風景画を手がけたが、
特に羊を描いた絵画がよく知られている。

羊飼いの女と羊たち

油彩 仏F2号



Jean-FERDINAN CHAIGNEAU

ジャン＝フェルディナン、シェノー (1830～1906)

1858年シャルル・ジャックを慕ってバルビゾン村に移住する。ジャックと同様の主題、羊の群れを描いたが、コローやドービニーの影響も受け、抒情的な羊のいる風景を描いた。

その優雅さゆえに、シェノーは「羊のラファエロ」の異名を取った。

池の辺の洗濯

キャンパス・油彩(仏 F8)



Leon Riche

レオン・リシェ(1847～1907)

バルビゾン派の影響を受けた風景画家で、
特にディアズやルソーの画風を受け継いでおり、
フォンテーヌブローの森や田園風景を多く誠実に描いた。
バルビゾン派最後の代表的な画家である

風景

キャンパス・油彩(30M)



Leon Riche

レオン・リシェ(1847～1907)

稲妻が光り、今にも大粒の雨が落ちてきそうな雰囲気。

『自然の動き』『生命力』を表す描写力は深化したバルビゾン絵画といえます

オワーズ川の岸辺

油彩 32.5×60.0cm



PIERRE-EMMANUAEL・DAMOYE

ピエール=エマニエル・ダモア(1847~1916)

コロー、ドービニーノ弟子。

自然を崇拜し、虚飾のない自然を溢れるような豊かな色彩で描いたダモアは、コロー、ドービニーのもっともすぐれた後継者の一人とされている。

1889年の万国博覧会で金賞を受賞、

1893年にはレジオン・ドヌール勲章を獲得している。

1890年にできた国立美術協会の創立者の一人でありその委員を務めた。

貴重なミレーの版画

ミレーの版画は生涯において数が少なく、
20点のエッチング、6点のリトグラフ、
2点のガラス版画、3点の木版画を制作しているに過ぎない。
しかしその版画は油彩画やパステルに比べて力強い線描や視覚的な
印象は絵画を捉えるのに非常に参考になり、またその制作が
しばしば絵画に先行して名作を生み出していることは重要であります。



鋤に寄りかかる男（1848年）

ジャン=フランソワ・ミレー



牛乳をかき回す女（1855年）

ジャン=フランソワ・ミレー



落ち穂拾い（1855年）

ジャン=フランソワ・ミレー